



I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。初めに、地元協力者から次のように呼び掛けられた。「しんどさが見える眼鏡を持ちませんか？子どもたちの背景やくらしを見ることができる眼鏡を持ち、子どもたちと関わっていければと考えている。また、ネイソン・マンデラの言葉『教育とは世界を変えることのできるもっとも強力な武器である。』他者に寄り添う、共感する、思いやりを持つ、自分ごとにしていくことが差別解消につながっていくのではないかと考えている。報告を通して、みなさんで議論を深め、差別解消に向かっていきましょう。」

この後、討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－㉔

自分事としてとらえ、灯火をつける人権教育
(大分県人教)

－主な質疑と意見－

三重 人権劇はすてきだったけど、地区の子たちの想像すると・・・「被差別の・・・」という言葉を出してもいいのかなという思いがある。この学級の子たちの課題とどうとらえているのかを知りたい。

報告者 被差別の側を演じていいのか？と考えたが、治一郎を演じさせることも学びがあると確信した。演じたいじめる役の子が「いじめてしまった、治一郎さんは強いな、差別をする側と差別をされる側を感じることができた。」しんどさをもっていたかという自分の気持ちを素直に言えない子、空気を読む子、がたくさんいる。そのしんどさはどこからくるのかというわからないが、劇をすることで自分の気持ちを安心して言えるクラスになっている。

三重 被差別地区の思いを知り・・・感じた。自分事としてとらえるとは？先生の体験の中で自身が解放されたこととかあったか？

報告者 個々の報告に入る前に自分事って何？これだという答えはないが、自分も学習者でありたい。子どもから質問が来た時にこたえられないときもある。ともに学習すること。きっかけとしてはひいばあちゃんから「どこにあそびに行くの？」「そこにいったらあかん」といわれたこと。父がどうすいをしてたのでいろいろな勉強会にいった。高校の時に差別ビラをまかれたりした。教員になった時に地区補習していたときとか出会い直しを何度もした。つねに何度も学び直しすることが部落問題学習のかな・・・どうのりこえていくか、だと思う。

徳島 Aの発言で「先生差別はなくならないと思います。」自信をもってなくならないと思っている Aの気持ちはどこからくるのか？実体験から？差別＝いじめ もし差別＝いじめという言葉と同義語であるならニュアンスが変わってくる。Aの差別に対してのとらえ方はどうだったのか？

報告者 出してしまっ、しまったな・・・と思っている。隣保館で学習しているものを引用した。「なくならないと思います。」という言葉は母からの影響か。医療従事者をしている苦勞を知っているからか？じいちゃんが戦争やジェンダーの問題を話すことに影響しているのかなと思う。学び直しをさせていきたいと思う。

－報告1－㉕

あなたがいてくれたから (高知県人教)

－主な質疑と意見－

三重 落ち着きがないことが当たり前だろうと想像する。これだけいろいろな子どもたちを認め合える学級を担任できるのは強みだと考えている。Aのしんどさはどこから来るのか、どう捉えているのか

報告者 やったことは残らず、やられたことが残って家で話す。保護者に事実を伝えると、自分の子が悪いのかという反応。周りの厳しい目があったのが、差別の現実だと思う。周りを変える取組みだった。

京都 部落問題との関わりについて、報告者の想いを聞かせてほしい。

報告者 知識や勉強が浅い。昨年度から2年目。校区のこと、地区のことについて学びが少なかった。これまでの第六小学校の取組について知ったり、児童館へ話を聴きに行ったりした。地域教材をやった記録がなかったので話を聴いたが、20～30年前の指導員の話から、地域をオープンにしないでほしいという思いがあった。当時の中学校で、弁論大会で地域のことを伝えようとしたが反対があってできなかった。知ろうとする、アンテナを張る。地域とつないで子どもたちの学びを深めていきたいと考える。そのためにもっと勉強していきたい。

－報告1－㉗

自分らしさを大切に（徳島県人教）

－主な質疑と意見－

福岡 生徒の A さんは変わっていった変容の部分を詳しく。

報告者 自分を優等生として周りからみられている。そうであらねばならないと思っていた。本当は言葉にしたらそんなこと思っていたのか？と思われるのが怖い。クラスみんなが本音で語れるようになってほしい。人権学習の中で全員が発言できるようにしたい。討論をすることを好むようになった。共感を含めて批判もするようになった。私もそう思わない、という本音で伝える雰囲気は A さんにより影響を与えた。

徳島 「差別があった。」過去形になっているのに違和感がある。

報告者 確かにそうだな…と思う。M さんのことで考えていたように思う。亡くなられてしまったということから差別が過去形にしてしまった。大きなハンセン病というとらえかたでは今でも差別はあるととらえなければならぬ。

－報告1－㉘

自分ならどうする？！～正しいことを学び、自信をもって行動できる人権教育～（兵庫県人教）

－主な質疑と意見－

奈良 職員が部落問題を語るということをどのようにとらえているかを大切にしている。一人の人間としてこの問題を自分ごととしてとらえるか。授業の中では考えるが、休み時間の行動が違うのと同じように、教師も仕事を離れて、部落問題をどう考えるかが重要だと思う。

三重 部落問題を昔のこととしてほしくない。南あわじ市は今現在の差別をどうとらえているのか？差別の実態を子どもたちがつかんで子どもたちから問われることがある。私たちが学び続けないと子どもたちの前に立てないと思っている。南あわじの取組みは応援したい。

報告者 地域があるなしにかかわらず人権学習をしていくことが大事だと思っている。「先生ほんまにこんなあるのかと思ったけど、川口さんの話を聞いて驚きました。学んでいきます。」生徒から。

－報告1－㉙

これ以上頑張られへん（大阪市人教）

－主な質疑と意見－

奈良 自分も子どもたちに「頑張れよ」と言っていた。軽はずみで言う「頑張れ」は教員のエゴかもしれない。子どもの背景などをつかんだ上での「頑張れ」はエゴとは違うと思う。

三重 班長を決めるにあたって、20名の中でみんな経験してほしいと言う思いでどうしていたのか。ユウの不安の原因について。頑張っていることは

子どもたちそれぞれ違う。頑張れとは言わないようにしている。どこで「頑張っている」と判断しているのか。交換ノートについて、お母さんは交換ノートは知っていると思うが、そのことをお母さんはどう感じていたのか。

報告者 1ヶ月くらいで班替えをしていた。固定化していくので、決め方を変えて決めていた。自分からやりたいと言わないが、やりたいと思っていた子や、意外な活躍をする子がいた。

お母さんも厳しく指導することで、朝から元気がないこともあった。人と接することが好きだったので、友だち関係でもめたときもとても落ち込んでいた。立ち直るのにも時間がかかった。クールダウンして話しを聴くなども行った。お母さんはユウのがんばりを認める部分もあったが、マイナスに捉えることが多かった。6時以降に電話したり、学校に来てもらったりして、いいところを伝えていた。今の子どもたちはがんばり方がわからないのではないかと。具体的にこうすれば、とアドバイスとセットで伝えている。ノートを見たお母さんの反応は、好意的に見ていたと思う。お母さんと一緒に反省した。

III 総括討論

大分 若い方に同和教育を伝えていく。授業のプログラム7時間、の中で身分制、河原者などの言葉を聞いて「かわいそう」とかの感想が出てくることに違和感がある。小学校では社会科の教科書に差別されていた人たちのことが出ている。中学校で授業をしたときにそこが出てこなかったのか？小中連携はできているのか。

報告者(兵庫) 生徒たちは「やったな～」ぐらいであった。南あわじ市では、小学校でも1年生から6年生までの人権学習のプログラムを組んでいる。1年に一回検討をしている。まだまだ積み上げる内容や、授業の内容を検討していかななくてはならないと考えている。

三重 職員の中で部落問題学習の研修をどのように進めていくのか。職員が部落問題に関して語るという機会(場)を設けている。どのように指導するのかというのではなく、部落問題を一人の人間としてどのようにとらえているのかということ語り合っている。仕事をしていないときの自分が、普段から部落問題に関して話し合っているのか、おかしさに気づけているのか。それが本当の自分事ではないか。自分の差別性に向き合っているのか。それが子どもたちに語っていくことが大切ではないかと思っている。

報告者(大分) 空白の12年間、部落問題学習を知らない人が採用されてきている。どうして行ったらいいのか、夏休みに教職員研修を行っている。指導案を考えたり、映像を見ながら意見交流をしたりしている。大事なことは本音で言い合えること。自分たちが子どもだったら、という視点が必要である。自分が部落問題に向き合っていく。

三重 知ろうとしないと見えてこない。自分で地域のことや子どもの生活のことを知ろうとしないと、自分で見つけに行かないとみつからない。動き出すと様々な情報が得られる。家庭訪問に行かない日はない。生活背景を知ることから子どもたちのことがもっとわかることがある。そこから集団づくりが広がっていく。自分が解放されていくのもわかる。

報告者から

大分 レポートを書くことはつらいことだ。日記じゃない。自分と向き合わないといけないから。水平社館長から「ねつっていうのは heat ではなく warm だ」と。あったかくという言葉にハッとさせられた。

高知 また実践を積み重ねてここに戻ってきたいと思います。

徳島 こんなにじっくり過去を振り返ることはなかったです。これからの教員生活を積み重ねて、経験を積み重ねて学習を深めていこうと思いました。

兵庫 若手への継承と言っていますが、逆に若手からの継承があります。若手もベテランも学び続けることが大事だと感じます。ここで報告することでさらに強く感じました。

大阪 市人教で報告して終わっていたらここまでの自分の変容を感じることができることができなかつたと思います。練り直しながら自分と向き合うことができました。またみなさんと対話することで深めることができました。子どもにも自分事について一緒に考える機会を作っていきたいです。